

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520200
 研究課題名(和文) 戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究 井上紅梅を中心に

 研究課題名(英文) Empirical Study on Cultural Adoption Activity by Chinese Culture Enthusiast in Prewar Period

 研究代表者
 勝山 稔 (KATSUYAMA, MINORU)

 東北大学・国際文化研究科・准教授

 研究者番号：80302199

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国白話小説の受容に多大な貢献を果たした支那愛好者の文化受容の研究の一環として、先行研究で「謎の男(三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」)」と称されていた井上紅梅の受容活動の全貌を把握するため、日本各地に散在している井上紅梅に関する著述の収集を行った。彼の著述活動の大半は上海・南京・蘇州という当時で言うところの「外地」で行われたこと。一部の活動は戦中期に重複しているため、保存状況は劣悪でしかも少数の記録しか残されていなかった。そのため資料収集を実施し、特に神戸大学や国会図書館(東京本館・関西館)などでは従来誰もその存在を知らなかった井上紅梅に関する著作や記録を発見することが出来た。

研究成果の概要(英文)：In this research, I collected the related material of Kobai Inoue which was in various places in Japan. His activity was not only in Japan but also in Shanghai, Nanjing, and Suzhou. Moreover, his activity overlapped with the period of World War II, so collecting material was filled with difficulty. However, after succeeding collecting and analyzing the large amount of writings and records which were undiscovered until this investigation, I elucidated the uncertainty of Kobai Inoue's activity.

研究分野：中国文学

 キーワード：井上紅梅 宮田芳三 金海陵縦欲亡身 寺田寅彦 諸官省用達商人名鑑 支那愛好者 京本通俗小説
 京浜実業家名鑑

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究対象は、戦前の支那愛好者・井上紅梅による受容活動である。なぜ井上紅梅の活動を対象とするのかというと、井上紅梅による中国文化受容の事例が、(1) 明治以降の中国通俗文学の受容事例として典型的事例として恰好な存在であること。そして彼の受容活動が中国通俗文学のみならず、(2) 中国近代文学の父ともいえる魯迅の小説の、日本における最初期の翻訳者として極めて重要役割を果たしているからである。

中国から日本への文化受容は古来連続と行われてきたが、古典小説について言えば、二つの潮流が存在した。第一には文言小説(漢文体の小説)の受容、第二には白話小説(口語体の小説)の受容である。日本は当初文言小説を受容してきたが、明代以後、通俗的な白話(口語)という表現を駆使した小説が登場し『西遊記』『三国志通俗演義』『水滸伝』『紅樓夢』等の著名な作品が生み出された。そのため日本でも江戸時代から白話小説を輸入し受容を試みられるようになったが、明治・大正時代から戦前までの期間では、その受容の主体 即ち白話小説の翻訳者は、何れも中国文化を愛好する在野の知識人(支那愛好者)による翻訳で占められていた。

例えば、「杜子春」で有名な白話小説集『三言』を取り上げ、未開拓であった明治以後の受容状況を考察した結果、明治時代から終戦直後までに『三言』の翻訳に携わった人物は合計 21 名にも達したが、中国語講師であった金國璞や、後に島根大学の教壇に上がった増田渉を除けば、これらの翻訳は、何れも小説家や文人等の在野の支那愛好者で占められている事実が裏付けられた。

この原因について当時の大学研究者の記録を調べると、当時は白話小説を正確に逐語訳するだけの研究水準に到達しておらず、克服すべき語釈上の問題が多く山積していたという。そのため大学研究者による翻訳は大幅に遅れる一方、作品の魅力の紹介に比重を置いた民間の翻訳が陸続と登場してきた。これら民間の翻訳者が、停頓する専門家の翻訳に代わって様々な作品を日本人の人口に膾炙させた功績は極めて大きい。しかし、これら支那愛好者の業績は、斯界で学問的に検討されることは少なく、受容史的な位置付けも十分に検討されていない。そのため本研究では中国愛好者の一人・井上紅梅に注目し、かかる受容活動の実態を明らかにしたいと考えている。

井上紅梅に焦点を絞ったのには、もう一つ明確な理由がある。それは紅梅が中国近代小説の受容にも深く関与していた事実である。昭和初期、無名であった魯迅の小説に彼は注目し、内外の雑誌にその翻訳を掲載、最初期の魯迅作品の紹介に多大な貢献をした。しかし原作者の魯迅から酷評されたことから、紅梅は魯迅にののしられた人物と論評され、紅

梅の訳業を学問的俎上に載せること自体半ば禁忌となっている。

しかし、紅梅の翻訳は当時の翻訳水準と比較対照しても遜色がなかったという意外な事実が判明し、更に原因を追及したところ、酷評の一因が、彼の翻訳水準の問題ではなく、単なる魯迅の個人的感情に基づく評価に過ぎないことが明らかになったのである。

井上紅梅の研究は、日中文化交流や魯迅研究の一環として注目を浴びている(符麗紅・三宝政美 2001)(周国偉 2006)にもかかわらず、考察の何れもが「魯迅にののしられた人物」を出発点として論を展開し、芥川龍之介や佐藤春夫から絶賛され、無比無類とも言える旺盛な翻訳業績を残した紅梅の実態とは余りにもかけ離れた考察に終始している。そのため応募者はこの種の支那愛好者に正確かつ客観的な評価を与えるべく、近代日本における支那愛好者が果たした受容活動の役割について詳細な分析を試みたいと考えている。

2. 研究の目的

明治大正から戦前にかけて、日本では中国通俗文学の受容に異変が発生していた。通俗文学を研究する大学の専門家の殆どが、克服すべき語釈上の問題が多すぎるとして翻訳をためらい、受容は停頓状態に陥っていたのである。この状況下で、大学関係者に代わって受容を支えたのは中国文化を愛好する在野の知識人(支那愛好者)であった。彼等は独自の学識で『三国志』『水滸伝』『西遊記』等の翻訳を模索し、現在の日本でこれらの作品が人口に膾炙される存在となったのは、彼等の尽力に他ならなかった。しかし彼等の活動には不明点が多く、その実像は現在まで判っていない。そこで本研究では、これらの支那愛好者の中から井上紅梅に注目し、彼が手掛けた中国通俗小説の翻訳活動の実態を解き明かす。また、これら支那愛好者がなぜ正当な評価を受けず、人知れず世に埋もれていたのかを探るべく、井上紅梅による魯迅作品の翻訳活動を取り上げ、中国愛好者の発達とその限界を社会的背景まで含め体系的な分析を試みたい。同時に、本研究の成果によって日中文化交流史のみならず、白話小説史や魯迅研究の発展にも寄与したい。

3. 研究の方法

井上紅梅の偏った評価の原因の一つに、深刻な資料不足がある。先行研究でも「その生涯については謎ばかり」(三石 1974)と指摘する通り、彼の活動は勿論のこと、正確な生没年すら判らないという有様であった。そのため、事前に 5 年間がかりで井上紅梅の業績や事跡に関する調査を実施し、現時点で井上

紅梅の著作 17 点、雑誌寄稿 123 点、新聞寄稿記事 299 点など膨大な数の業績の所在を既に確認している。これによって謎に包まれていた彼の事跡を一気に解明し、当時の支那愛好者の実像を明らかにしようと考えている。

そのため当初は日本各地に分散する未収集の井上紅梅や「支那通」に関連する資料収集に重点を置く。そして紅梅や支那通の活躍の地であった上海での資料収集を実施し、国内に残る必要資料もこの時期までに収集を完了する。これにより業績の全貌を明確化させ、基礎作業としての年譜作成を完了させる。

そして紅梅の事跡に関する研究、紅梅の業績に関する研究というアプローチを駆使して彼の実像を多角的に解明し、支那愛好者がなぜ正当な評価を受けず、人知れず世に埋もれていったのかという疑問に、井上紅梅というケーススタディーを介して回答を導き出す。

4. 研究成果

本研究は、東日本大震災による研究棟の改修工事の最中に始まったため、時間的・物理的な制約が多く、本格的な研究計画は予定よりもやや遅れて開始した。しかし、実際に資料収集作業を始めると、資料収集の度に新たな資料の発見があったこと。そして新たな資料の発見が、更に新しい資料の収集の必要を生むこととなり、重要な発見や、井上紅梅に関する新たな課題も見えてきた。当初予定していた「発見が予想される資料」以上の発見が見出され、一時期は正直「応接の暇もない程」発見が相次いだ。現在はこれらの発見資料の中から、特に重要な寺田寅彦の著作日記に見える井上紅梅について、支那風俗研究会刊『支那風俗』及び金風社刊『上海案内』に見える井上紅梅の記述、『諸官省用達商人名鑑（第一回後編・第二回前編）』に見える井上商店について、そして近年発見した「京本通俗小説二十一巻 金虞海陵王荒淫改題」に関する論文を作成し、発表した。

（寺田寅彦の著作日記に見える井上紅梅）

寺田寅彦の日記・随筆等の著作は、紅梅が東京に滞在していた青年期や晩年期の記録が圧倒的に多い、紅梅の事跡を補完する貴重な資料であることが判明した。

特に、従来全く不明であった紅梅の青年期の動向が、寅彦の随筆に詳述された。それによると、寅彦の上京時には既に井上商店内では文学熱が盛んであり、紅梅も文学誌への投稿を盛んに行っていたこと。そしてその状況に夏目漱石や正岡子規と交遊を持つ寅彦が加わり、寅彦自身も紅梅らに俳句の手ほどきをすることもあった。このように紅梅は、多感な青年期に、寅彦を介して漱石や子規という文学思潮も吸収し、文学への憧憬を深めて

いった。

また従来未解明であった紅梅の上海渡航直前の状況や、紅梅渡航後の井上商店の動向などが明らかになった。前者は井上家の後継問題があり、紅梅は井上商店の後継者に不向きとして、遅くとも明治三八年に紅梅を「廃嫡」となり、井上商店を出て湯島天神町に仮寓し、中華料理屋経営や、日本郵船への転職の模索が見えること。また紅梅の実子の存在も寅彦の日記で初めて確認された記録である。

後者については、井上安兵衛と未亡人の死去、井上芳蔵の二代目井上安兵衛の襲名と、肺病による死亡、そして井上商店の一家離散という結末まで確認できた。

また、紅梅の帰国以後の動向についても、紅梅本人の記録が皆無に近かったが、寅彦の日記によって、経済的に逼迫していた事実を確認することが出来た。昭和五年以後は、『魯迅全集』と『今古奇観』の翻訳という彼の二大業績が結実する時期ではあるが、その華々しい業績とは裏腹に、彼は常に貧困との闘いを続けていたのである。

（『京浜実業家名鑑』等の新史料に見える井上商店について）

井上紅梅の基礎研究の一環として、従来不明であった井上家が経営する井上商店について『京浜実業家名鑑』及び『諸官省用達商人名鑑』を用いて分析を試みた。

『京浜実業家名鑑』によると、井上安兵衛の経営する井上商店は、幕末における洋物商の先駆的存在であり、先代井上安兵衛死去とともに古着商から洋服・洋物商へと転身。その後明治維新を経たのち、明治五年から陸軍省の御用達（洋服織物類）となり、現在に至るとある。また井上商店の所在地が明確化したほか、当時の陸軍衛生部の求めに応じて、本業である洋服織物の販売から包帯の製造機械まで事業を拡大していた。

更に『諸官省用達商人名鑑』によると、井上商店は、明治一〇年の西南戦争と、明治二七～二八年の日清戦争の際には軍需品の供給に尽力し、更に明治三七～三八年の日露戦争の際には、更に事業を拡大し、自前で繻帯材料製造工場・医療器械製造工場を創設した。井上商店が製造する繻帯の特徴は、専売特許を取得した縮織繻帯であり、この縮織繻帯は陸軍薬局方の規定品に採用された。また、井上商店の取り扱い商品に和洋織物及び医療機器があった。これまで紅梅の事跡について考察を試みた際に、紅梅が医薬品の知識を持つことが明らかになっている。従来なぜ紅梅が医薬品に関わる職務に就くのか判然としなかったが、井上商店での業務経験が関係していると判断して相違ない。

『諸官省用達商人名鑑 第二回前編』によると縮織繻帯を発明したのは、井上商店の店員・宮田芳三であった。彼は明治一四年神奈

川島橋村生まれで、紅梅と同年の出生。明治二七年に井上商店に入り、井上商店勤務の傍ら早稲田大学講義録で勉学に励み、校外試験を経て卒業したほか、宮田芳三は文学を趣味とし、彼の文学創作活動は井上紅梅のそれを遙かに凌ぐものであった。

(井上商店店長の宮田芳三と井上紅梅との関係について)

国立国会図書館で発見された『諸官省用達商人名鑑』所載の井上商店に関する記事に注目し、紅梅の事跡を語る上で、必要不可欠な井上商店の動向や、紅梅と同様に文学創作に傾倒した宮田芳三について分析を試みた。その研究内容を要約すると以下の通りである。

『諸官省用達商人名鑑』によると、井上商店は、幕末に藩邸や幕府の御用達として出発、そして明治維新後は兵部省の御用商人となり、明治三七～三八年の日露戦争の際には、更に事業を拡大し、自前で繻帯材料製造工場・医療器械製造工場を創設し、商取引のみならず医療品の製造にも事業を拡大していた。

井上商店の店員で伸縮繻帯を発明した宮田芳三は、明治一四年三月神奈川県橋本郡橋村生まれで、一三歳から井上商店で勤務し、井上商店勤務の傍ら早稲田大学講義録で勉学に励み、校外試験を経て卒業している。また彼は青年文学雑誌の常連として知られており、紅梅の文筆活動を遙かに上回る活躍を示した。芳三は無名の紅梅をわざわざ青年文士の会合に招き、時には紅梅と芳三の連名で作品を投稿するなど、良きライバルの間柄であったことが理解できる。紅梅の文筆活動の最初期に於いて、全国紙の懸賞論文で屈指の成績を収めていた宮田芳三の存在は決して小さいものではなかったであろう。

文学創作の傍らで陸軍薬局方規定品に認定された伸縮繻帯を発明した芳三を見込んで、初代井上安兵衛は「井上商店の後継者には養子の井上紅梅よりも寧ろ宮田芳三が適当」と判断。井上紅梅は商店の後継者には不向きとして廃嫡とする一方、宮田芳三と明治三八年頃に養子縁組みを行い、宮田は井上由蔵に改名する。これで井上商店の世代交代は完了したが、廃嫡後も未精算であった店の商権と資産負債をすべて井上由蔵(宮田芳三)に譲渡したため、紅梅は生活の糧を奪われ、大正二年夏上海に渡航。後に上海の邦字新聞社の新聞記者として就職することとなる。

宮田芳三のもとで新体制となった井上商店であったが、井上安兵衛襲名三年後には肺病で入院、四年弱の闘病生活の後に二代目井上安兵衛が死亡し、その後程なくして井上商店は一家離散することとなった。

(井上紅梅による支那風俗研究会立ち上げと停刊について)

ここでは井上紅梅が上海で発足させた「支

那風俗研究会」を取り上げ、彼が白話小説の翻訳を手がける契機となった雑誌『支那風俗』の停刊の経緯を検討することで、彼の業績の再評価に向けた基礎的考察を行うこととした。

紅梅が上海の邦字新聞社・上海日日新聞に入社したのは大正四年の秋で、それから約二年間、彼は新聞記者として勤務していた。彼が風俗研究を志した発端は、紅梅の友人・歐陽予倩から紹介された『神州日報』の編集長・余毅民の影響が大きかった。

会誌『支那風俗』は新聞記者や上海在留邦人の積極的な協力によって創刊されたが、二年目からは慢性的に投稿が少なく、それ以後は発起人である紅梅の寄稿で雑誌刊行を成り立たせる事となった。その後の特集企画などで再起を図ったが経営は思わしくなく、大正九年四月から雑誌『支那風俗』を停刊した。その後彼は雑誌『支那風俗』の蓄積を活用し、相次いで書籍を出版する一方、日本に帰国し日本への漢方薬の輸入も手がけるなど、資金作りに奔走している。

しかし広く寄附金を募集しながら突然会誌を停刊した紅梅の判断は、その後紅梅の支援者から激しい非難を浴びる結果を生んだ。その後、雑誌『支那風俗』再刊したものの、この時点で大半の支持者が離反、支那風俗研究会に広告を依頼する在留邦人も激減し、紅梅は上海の在留邦人社会から信用を失ったのである。

会誌『支那風俗』停刊の理由としては、第一には上海日本人社会からの協力を得られなくなった点があげられ、第二には紅梅自身の関心の所在の変化があげられる。紅梅は雑誌『支那風俗』を介して様々な中国風俗に関する旺盛な調査報告を行ったが、寄稿内容から見ても既に書き尽くした感があった。

そのため南京に転居した大正一一年からは、支那風俗研究会で目指した支那五大娯楽たる「喫・喝・嫖・賭・戯」に関する研究ではなく、「純粹の支那風俗」に関心を抱き、唐宋元明清の文芸に没頭することとなり、彼の二〇年以上にわたる白話小説の翻訳が始まることとなった。

(井上紅梅による『京本通俗小説』『金虞海陵王荒淫』解題について)

ここでは、短篇白話小説集「三言」の受容事例の中で、近年新たに発見された混沌庵「京本通俗小説二十一卷 金虞海陵王荒淫改題」(一九二九)を取り上げ、民間知識人による「三言」受容史に、新たな一面を提供することを目的とした。

本稿で扱う「金虞海陵王荒淫改題」は、『京本通俗小説』として「三言」に先駆けて発見されながら、『京本通俗小説』自体が偽書であったという作品発見の経緯、猥雑な内容から「三言」の中には本篇を削除した版本も多く、そもそも本篇の存在自体が殆ど知られて

いなかったという点、そして所載雑誌が大正末期から昭和初期にかけて流行したエログロ雑誌であった事など他の事例に比べて特殊な事例であった。

この紹介者である混沌庵であるが、中国古典小説に造詣が深い民間人で、東京と上海で活躍の拠点を持ち『京本通俗小説』を翻訳する能力を持つ人物となると、上海で執筆活動をしていた井上紅梅と言う人物が想起される。梅原北明が出版の規制を逃れるために一九二七年前後に上海で出版活動していた直後に「金虜海陵王荒淫解題」が掲載されたことや、その後も紅梅は『グロテスク』へ頻繁に寄稿している等の状況証拠から紅梅の筆である可能性が考えられる。また混沌庵が入手した刊本は、民国一四（一九二五）年刊行の排印本であることが特定できた。

解題中の訳文であるが、「金虜海陵王荒淫」は『金史』巻六三「海陵諸嬖伝」に依拠するため主に文言で書かれているため訓読翻訳の形跡が見られる。訳文はかなり正確に逐語訳しているが、「金虜海陵王荒淫」は「三言」中でも長編であり、全訳する紙幅を持たない訳者は、逐語訳を旨としつつも、話柄の本筋直接関係のない原文箇所を極力省略したものとと思われる。

混沌庵が紅梅であると仮定した上で、なぜ紅梅はこのような雑誌への寄稿を行ったのか。推論すると、紅梅側の事情に大きく左右されたのではないかとと思われる。当時の紅梅の執筆活動は魯迅を中心とする中国新文芸の紹介がメインであった。しかし当時の日本文壇では、殆ど中国新文芸については関心がなく、紅梅は、やむを得ず多くの需要が見込めた中国風俗紹介に傾注し、当時流行したエログロ雑誌にも積極的に寄稿した。それは自らの生計維持のためと思われる。また、上海の邦字新聞を活躍の舞台としていた紅梅が、エログロ雑誌を利用してでも全国誌への掲載も模索した一方、反体制・反ブルジョア思想を持つ梅原北明の思想性と一致し、『グロテスク』誌上での『阿Q正伝』の掲載に至ったのではないかと推測できるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

勝山稔、寺田寅彦の著作に現れた井上紅梅 井上紅梅に関する事跡研究の一環として、アジア史研究、査読あり、2015、第 2 号、18-34

勝山稔、井上紅梅の養家と宮田芳三について 井上紅梅に関する事跡研究の一環として、国際文化研究科論集、査読あり、2014、第 22 号、70-84

勝山稔、謎の漢文を解読せよ 白話文解読に挑んだ日本人たち、「知」の国際文化学

近世近代日本の学術と世界、東北大学国際文化研究科公開講座テキスト、査読なし、2014、2-44

勝山稔、日本伝統文化の形成を「訓読」から考える 近代日本における白話小説の文体、東アジア海域に漕ぎだす 訓読から見なおす東アジア、東京大学出版会、査読あり、2014、36-49

勝山稔、その物語は海域を越えて 東京・鎌倉の文筆家と中国白話小説「三言」、東アジア海域に漕ぎだす 海がはぐくむ日本文化、東京大学出版会、査読あり、2014、195-206

勝山稔、近代日本に於ける中国白話小説「三言」の受容について 新たに発見された松井等の事例(1922)を中心として、国際文化研究、第 20 号、査読あり、2014、73-86

勝山稔、井上紅梅の養家「井上商店」の記録について 井上紅梅に関する事跡研究の一環として、国際文化研究科論集、第 21 号、査読あり、2013、127-142

勝山稔、大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について 井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として 国際文化研究科論集、第 21 号、査読あり、2013、113-126

勝山稔、近代日本における白話小説『三言』の受容について、海域交流与日中文学国際学術研究会会議論文集、査読あり、2013、99-122

勝山稔、近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について 新たに発見された混沌庵(1929)を中心として、国際文化研究科論集、第 20 号、査読あり、2012、205-222

勝山稔、近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について 新たに発見された桃義会(1924)の翻訳事例を中心として、国際文化研究科論集、第 20 号、査読あり、2012、223-240

〔学会発表〕(計 4 件)

勝山稔、近代日本における白話小説『三言』の受容、海域交流研究会(国際学会) 2013 年 2 月 2 日、台湾中央研究院、台北(中国)

勝山稔、井上紅梅の養父・井上安兵衛について、海域交流研究会(国際学会) 2013 年 2 月 3 日、台湾中央研究院、台北(中国)

勝山稔、井上紅梅の養家「井上商店」の記録について、海域交流研究会、2013 年 12 月 4 日、高知県立大学

勝山稔、近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について 新たに発見された桃義会(1924)の翻訳事例を中心として、海域交流研究会、2012 年 12 月 8 日、広島大学文学部

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝山 稔 (KATSUYAMA, minoru)
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：80302199

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：